

第九話

沼のキツネ



むかし、尾浦に金吉つうおじいさんがいた。

この人もよくキツネに化かされる人だつた。お椀を、唐草模様の風呂敷を入れて、そいつを背負つて売りに歩くのが商売だつたけれど、ある日のこと、暗くなつても帰つてこないから、家の人
が探しにいったんだと。

そしたら、カヤがいっぱい生えているところに、ちよつとした沼があつたんだが、その沼さ入つて、首まで沼の水につかつて、

「いい湯だ。いい湯だ」

つて、上機嫌で唄つていたんだと。

あたりには、売り物のお椀がいっぱい散らばつていたんだとや。

この沼には昔からキツネが住み着いてるって言われていたが、あるとき、子どもと母親とで山さ焚たき物取りに行つたんだと。

母親が焚き物をとつてゐるうちに、子どもの姿が見えなくなつてしまつたんだと。

子どもは三つだつたつうから、一人で家さ帰ることもできな
いべ。

「きっと、山のどこかに迷い込んだに違ひない」

つて、心配して心配して探して歩いたんだと。

それでも、どこにもいないから、その日は家に帰つて、翌日、
こんどはみんなして探しにいつたんだと。

そしたら、そカヤ生えた沼のそばの、水がこちよこちよ流れてい
るところに、その子どもがいて、どこも傷もつかねえで、沼の
水を、ぱしゃぱしゃして遊んでいたんだと。

キツネに守つてもらつたんだべな。